



## 「乾燥地の自然 (乾燥地科学 シリーズ第2巻)」

篠田雅人 編著

古今書院, 2009年3月

224頁, 3800円 (本体価格)

ISBN 978-4-7722-3106-0

本書は、乾燥地に学び、乾燥地に貢献する「乾燥地科学シリーズ」(全5巻, 鳥取大学乾燥地研究センター監修)のうちの第2巻である。タイトル通り、本書では乾燥地の気候・水、地形、土壌・植生、植物、動物および環境変動について概説されており、本書を通読することによって、地学分野から生物分野まで、乾燥地を理解するために必要な基礎知識を修得できる(通読するには半日もかからない)。そんな本書の目次と各章の執筆者は以下の通りである(敬称略)。

1. 乾燥地の気候・水 (篠田雅人)
  - 1-1 気候景観
  - 1-2 乾燥気候の分布
  - 1-3 水収支
  - 1-4 熱収支
  - 1-5 大気循環
  - 1-6 季節変化
  - 1-7 経年変化
  - 1-8 砂漠化と干ばつ
2. 乾燥地の地形 (鹿島 薫)
  - 2-1 乾燥地に特徴的な地形
  - 2-2 砂漠・砂丘
  - 2-3 塩性湖沼・オアシス・ワジ
  - 2-4 ペディメント
  - 2-5 レス・黄砂
3. 乾燥地の土壌・植生 (田村憲司・程 云湘)
  - 3-1 土壌の生成
  - 3-2 植生
  - 3-3 過放牧・過耕作にともなう植生の退行と土壌劣化
4. 乾燥地の植物 (山本牧子・山中典和)
  - 4-1 乾燥条件下で生育する植物
  - 4-2 塩性条件下で生育する植物
5. 乾燥地の動物 (伊藤健彦)
  - 5-1 乾燥地の動物たち—進化の歴史と現在の分布—

- 5-2 砂漠で生き抜くために—乾燥・猛暑・極寒への適応—
- 5-3 草原—多様な大型動物が暮らす場所—
6. 乾燥地の環境変動 (鹿島 薫・篠田雅人)
  - 6-1 環境変動を探る
  - 6-2 地球史における長周期的変動
  - 6-3 第四紀・氷河時代
  - 6-4 氷河性海水準変動・海流変動・乾湿変動
  - 6-5 ヴェルム氷期
  - 6-6 1万2000~7000年前—急激な温暖化とその間の急変期—
  - 6-7 7000年前以降—一周期的な気候変動イベント—
  - 6-8 観測時代の経年変化
  - 6-9 将来予測

評者は「自然地理学」の講義をしていることもあって、専門書を読む時には使えそうなネタを探しながら読むことが多い。そのような視点で、本書を読んでいる「ビビッ」ときたところを紹介したい(順不同)。

1章と6章は、自分の知識を確認するという意味でも興味深く読めた。特に1章の後半は、本書の編者である篠田雅人さんがこれまでにこなしてきた研究(英語で書かれた論文)を概観できるという点で勉強になった。ただし、この章でピントが甘い図がいくつかみられたのは残念であった。

本の価格との関連もあるのだろうが、カラーの口絵があるとよいと思った。特に、2章の写真2-14(鳥取砂丘における新砂丘と古砂丘)は、上述した「自然地理学」の講義で毎年紹介しているテーマであり、「この写真がカラーだったら...」と思ったものである。

3章と4章は、自分が体験したことがある話には感情移入できた。胡楊の葉が上部と下部で形状が異なるという話では、その昔、中国の新疆ウイグル自治区で見た胡楊を思い出した。また、マングローブの耐塩性の話では、その昔、石垣島や西表島で初めて見て衝撃を受けたマングローブのことを思い出した。

本書全体を通じて、専門用語の英訳が併記されているのは親切だと思った。あまりアカデミックでないが、5章を読むことによって、サッカーJリーグ「鹿島アントラーズ」の名前の由来がよく分かったし、metabolic という単語の意味が代謝であることも初めて知った。

内容紹介というよりも、評者のとりとめのない感想

文になってしまったが、本書の雰囲気を感じとっていただければ幸いである。なお、本書の1～6章の内容はおおむね独立しており、興味のある章だけ読むこと

もできる。そこで、「天気」の読者の皆さんには1章と6章だけでも目を通すことをお勧めしたい。

(首都大学東京 松山 洋)

---